

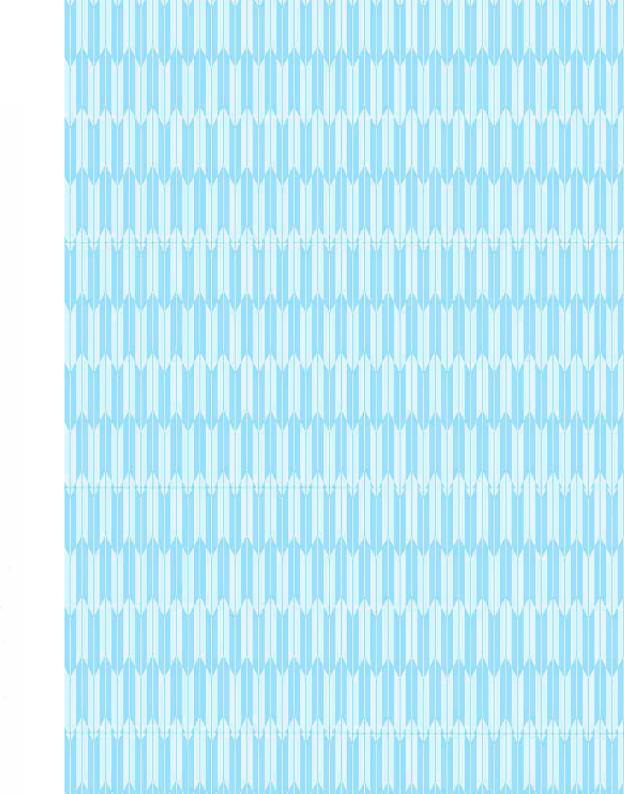


山巡り 須賀忠男



就五 2.763m

長野県の中房温泉が登山口た" 長い急愛で有名な山 北アルプス表銀座コ・スの始発点で" 荘嵩岩 砂石祭の美し、頂上をもっ 山小屋の燕山在からる油4日の 純雄走をスタートする。



あを

月 集

ど つ か

椎 0) 實 0) 甘 さ 云 \mathcal{O} た < 早 足 に

種 な す び ど つ か 女 王 蜂 0) B う

秋 澄 め り 鴉 は 聲 を 娯 め る

佐





う

す

5

氷

に

Z

ども

心

と老ご

Z

ろ

昨

夜

別

府

け

さ

登

別

去

年

今

年

練

馬

區

B

蟲

ほ

ほ

づ

き

0)

破

れ

か

5

驛

辯

O

箸

0)

短

に

冬

日

差

冬

0)

日

が

敷

き

つ

ぱ

な

0)

枕

上

Z

れ

か

5

O

1

夜

V

朝

草

泊



5

4

篠 田 純 子

木 漏 れ 日 静 か 0) _ 寸 浮 き 寝 中

鴨 浮 き 寝 __ 羽 号 令 め < 高 音

兩 0) 道 に 蜻 蛉 掬 ふ B が み つ <

雨 止 む を 蜻 蛉 は 石 に ぢ つ と 待 つ

ぼ か 去 け

と

h

O

翅

乾

き

り

に

り

竜 舌

蘭 静 か に 咲 き め 築 地 秋

篠 田 大 佳

都 市 0) 晚 秋

デ ル か L ら 男 女 が 歩き 秋 深

む

モ

晚 秋 O新 婦 O笑 む B 丸 0) 内

金 < 5 風 は な 墓 L 場 B 方 0) 格 崖 を 都 市 Oぼ 0) り 交 差 け 点 り

外 濠 0) 暗 渠 を 鷺 0) 浴 み 7 秋





十月や

須賀敏子

花紫苑揺れて秩父は遍路道

穭田や送電線の高きこと

初めての道を急げば草じらみ

駅近く人を恐れぬ石叩き

戦争はいつも置き去り実南天

検温銃額に当てて芸術祭

マ

ス

ク

7

合

唱

競

Z

+

月

B

新米を少し固めに炊きあげる

秋深む

田中藤穂

秋さびし小雨のままに昏るる庭

霧雨のなか野良猫はゆうゆうと

計

報

あ

り

旬

友

ま

た

減

る

秋

0)

冷

え

花の名を思ひ出せずに秋の道

だんだんと知人減る町秋深む

甲府盆地は秋のお祭父母遠し





年 振 り 際 <u>\</u> つ O蛍 草

中 に 甘 さ 広 が る 黒 葡 蔔

健 気 な り 行 交 Z 道 0) 草 紅 葉

Ŧī. 色 豆 ち り ば め る 如 草 紅 葉

仲 0) 秋 萬 古 焼 器 に 赤 ワ 1 ン

か

5

す

群

れ

賑

B

か

な

帰

路

秋

夕

焼

秋 O夜 怪 物 0) 如 暴 れ 雲

天 と 地 0) 今 朝 は 晴 B か 野 菊 咲

秋 草

森 な ほ 子



敬

Z

も

忘

れ

7

ゐ

る

も

敬

老

日

秋

草

O

束

出

る

頃

0)

道

O

駅

つ

<

つ

<

L

つ

残

し

7

嵐

過

ぐ

大

兩

0)

後

0)

快

晴

街

に

人

雑

草

O

み

な

秋

草

と

な

つ

7

ゐ

る

買

物

は

秋

草

0)

径

行

き

帰

り

谷

Ш

0)

音

け

Z

高

秋

O

雨

<

ち

び

る

に

粒

Z

れ

7

秋

0)

雨



赤 座 典 子

天 高 備 讃 諸 島 O<u>\f</u> 7

里 Щ O \neg 阿 讃 琴 南 秋 O色

擂 鉢 を 伏 せ Щ 並 秋 夕 焼

子 に 送 る 讃 岐 う hと 今 年 酒

役 終 \sim 7 玉 葱 小 屋 B 秋 風 裡

瀬

戸

大

橋

越

え

7

淡

路

に

秋

澄

め

り

家 庭 菜 袁 瓜 坊 0) 穴 四 つ 残 る

島 0) 秋 未 来 を 語 る 傘 寿 か

な

今 日 は 秋

秋 Ш 泉



太

陽

ŧ

風

0)

色

に

ŧ

今

日

は

秋

け

h

け

h

ぱ

遊

び

足

り

な

V

秋

0)

気

ま

ζ,

れ

に

毛

0)

<u>\f</u>

5

寄

る

秋

0)

風

強

小

さ

<

白

き

秋

O

ま

ま

と

0)

菜

に

香

る

B

金

木

犀

栗

虫

O

多

<

入

り

た

る

栗

を

む

<

輪

台

に

坐

7

重

た

き

菊

花

か

な

太

陽

に

か

つ

と

開

<

石

榴

か

な



13 12

菊 人

大 日 向 江

人 目 引 < 選 挙 ポ ス タ 柿 を 干 す

手 に な れ た 玉 語 辞 典 φ 蔦 枯 れ

ラ フ ラ ン ス ゴ ッ ホ O裸 婦 O胸 高

菊 人 形 義 経 低 を つ <

夜 更 を L 7 今 夜 又 栗 を 剥 <

金 継 O有 田 0) \coprod に 栗 を 盛 る

赤

い

羽

根

駅

前

に

行

<

バ

ス

停

に

焼 藷 \mathcal{O} 匂 \mathcal{C} 漂 5 城 下 町

七郎衛門吉保

備 前 瀬 戸

< Þ 兄 は 備 前 に 眠 り 入 り

秋

闌

力 口 卜 に 紅 葉 か つ 散 り 兄 0) 入 る

蒼 天 を 分 け 7 大 橋 瀬 戸 0) 秋

地 O食 酒 阿 讃 \mathcal{O} Ш 0) 秋 O宿

播 磨 灘 嘉 兵 0) 海 B 天 高

淡

路

島

赤

銅

色

0)

秋

O

玉ね

葱ぎ

衛

鳶 紀 伊 湾 を 橙 色 に 秋 夕 日

O笛 見 上 ζ̈, る 背 伸 び 新 松 子



秌收集

室 異 思 紫 チ 夜 墓 喃 黒 百 語 式 玉 地 年 り立てばアンナプル S して稚児は花火に魅せら に き 母たわ を O0) Oゐる二匹 上 Oマ綿毛となりて煌めけ 不思議な文字や 万 渓 り 手を洗 さな花を 年 間 わ を 雪 象 に 囃 住 O0) 浮 z 猫 み のぞきこ 游 切 昼 7 や 秋 L 小鳥来 れ 赤 青 秋 跡 暑 真 平 茶 尽 虫 る む る 5 蛉 篠田 七郎 佐藤 赤座 長崎 篠田 森 田中 須賀 衛門吉保 なほ子 典子 桂子 竹僊 藤穂 敏子 大佳

秋 Ш 月 声 ごと買ふ季節 盛 代 B B り 「 小 さ Oそ 茸 う い 0) はず O秋 料 舟 理 を も「秋桜」 パ 0) Z 薔薇や薔 ぎ を 出 焼 ŧ 七郎衛 秋 \prod

佳

葡 ょ 赤 蔔 り 月 空 き 家 ぼ \exists 宵 に 長 須 篠 \mathbb{H} 賀 田 門吉保 大 桂 敏 ほ 子 佳 子 子 穂

盛

な

放

水

小

さ

き

虹

りを

つ

つ

栗むく

夜 半

秋

Ш

黒

崖

絶

壁

薄

葉

子

朝

0)

7

Z

0)

夏

お

土

産

に

鮨

菓子•

き

西

O

風

吹

子

忌

B

夫 は 獣

肉

を

卓

に

並

~"





泉

ゆく秋や雨の降る日はよい天氣

佐藤竹僊

せ我慢、 にはまって、ご機嫌だったように思います。 作者にとって「雨の日」はどういう日なのでしょうか。思いつくままに考えると、雨が好き、 天邪鬼など、色々と思い付きます。 読んだ直感では、 作者の口笛が聞こえてきそうです。 晩秋の雨が作者の気分とうまい具合

銀木犀竹の帚のまがり瞼

佐藤竹煙

負のスパイラルに陥っていきます。湯や水につけ、 ています。掃除は行き届いて、良い匂いの銀木犀の回りには、ほうき目の跡も見えます。(純子) きません。 等は

一旦癖がつくと、癖がどんどん進んでしまいます。

癖に逆らい持ち替えると、

掃除が捗らず、 以上は50数年前の私の体験で、 座敷箒でした。この句の竹箒は、 癖を直そうとするのですが、なかなか上手くい 静かに立て掛けられ

風の音眼で確かめし白秋の

大日向幸江

比喩を用いて風の音の映像をはっきりと明示しないことで、 俳句で切字を置かない型は倒置法を用いたと考えるのが穏当でしょう。 映像を次句 「色鳥の声降りそそぐ駅の しかし、 掲句については

18

道」に誘導するように読めました。 めかすようで、 楽しく読めました。 (大佳) 短歌の上の句や連句の付句のように、 続きの映像を読者にほの

遺言が「ほととぎす」選敗戦忌

七郎衛門吉保

ることが許されません。 を想像しました。 戦時中の若い俳人が、初めてホトトギスの選に入ったと喜んで、それっきり戦死したという物語 -をご覧になったのでしょうか。 達成感と無念が見えます。 (大佳) 鑑賞者は番組未見のために、 作者は八月に放送されたNHKEテレのドキュメンタ 歴史に埋もれた作者に名前を付け

炎天やワイヤーカムの追ひかくる

篠田純子

ポーツ観戦の発展は、 込められています。 ばしばあります。 夏季オリンピックのスケートボードで縦横無尽に駆け回ったワイヤーカムを詠んだ句です。 ワイヤーカムが競技者を追いかけて、 (大佳) 映像技術の発展と共にありました。 捕まえようとする熱量が炎天という季語に なんでこのアングルで、

(部の実きみどり緑今朝の秋

篠田純子

紫式部の実は名にある通り紫色の実で知られる。 しかし端から紫色ではない。 この句は秋の初め

の式部の佇ひをさはやかに詠まれてゐる。中七「きみどり緑」とあるが、 い微妙な色の差を言外に伝へて見事。(喜孝)

は 傘 も 7 雨 を 濡 れ に ゖ IJ

田 大 佳

姉は母に言いつけていました。この少年も、 感を覚えました。 うか。私も幼い頃、型破りな行動をすることがありました。「純ちゃんがまた変なことしてる」と に濡れない」「傘を外すと雨が降る」 無季の俳句ですが惹かれました。 (純子) 雨を濡れにけりの、「を」 少年は雨の感触を確認しているようです。 お爺さんになっても、 がいいとおもいます。「傘をさすと雨 好奇心旺盛なのかしらと、 動物的感覚でしょ

り傘を挿してゐるのだが濡れるのもいとはず踊るといふシーンの映画があったやうな気がする。 掲句、 雨は映画の大切なシーンに使はれる。失意の人が傘をぶら下げたまま濡れてゐる様。 少年期の思ひつめた感情の表現と読んだ。 (喜孝) 喜びのあま

遊 郭 の あ ŋ 跡 か ŧ 秋 の 蝶

賀 敏子

奏したのか、そうした痕跡を懐かしむ手立てが失われつつあります。 花街の痕跡を辿る時、 野良猫の多寡で想像を膨らませます。 作者の提示した秋蝶は、 最近は野良猫の去勢が功を

と繋がります。 く弱々しいイメージで、 (大佳) あわれを感じます。 無機質な街に迷い込んできた蝶が、 作者の想像の世界 21

終戦 とい ふ記念日を子 等 は 知らず

田 中

のです。 残す日となったのでしょう。と、 虚脱感を得ることも、挫折感を得ることも、 十分ではありません。終戦という「死ななければならない」日常の終わりは、解放感を得ることも、 でしか知る縁がありません。大袈裟な美談も聞きかじりの糾弾も、青年の戦争を理解するのに必要 終戦について、 (大佳) 戦争を体験していない世代には、 史料から想像はできますが、 あらゆる感情をない混ぜにして、 戦争の名前を借りた空想の物語を消費すること それも知らない者の想像でしかない 青年の想いを未来に

は蜂の 餌 食と な IJ 痛 まし

長 崎

うことに抵抗を覚えるという葛藤を掲句に見ました。 読者に伝えます。 土の上の穏やかな暮らしの中に、 蝶を愛でる上では衝撃的です。 生き物の命を奪うことで我々は生き永らえているが、 命のやりとりを見つけた作者です。 目を逸らしながら、自然のありのままの姿を作者は見て、 (大佳) 可愛らしい蝶が蜂に捕まる いたずらに生き物の命を奪

冷麦の白の透けくるまで見詰め

森なほ子

見る思いです。 しています。白と認識していたものが観察を深めるごとに認識が改まっていきます。 た現実主義」というのが原義であるとありました。作者はふとした瞬間に徹底して冷麦の白を観察 シュルレアリスムの解説書には、 (大佳) 日本語で言われている「シュール」は本意ではなく、 観察の奥義を

ぬひぐるみーつ増やして星月夜

赤座典子

ながらも頼もしい仲間が作者の夜に加わりました。 間をひとつ加わることで、新しい星を寝室に見つけたと読みました。 ぬいぐるみの目に星を見ます。 沢山の星が寝室にあふれていて、沢山あるぬいぐるみに新たな仲 (大佳) 光の弱く寂しい夜に、

盂蘭盆会マスクの僧の読経かな

秋川泉

をあしらうと親しみがあるし、 きます。読経のマスクは、真っ白で無骨な不織布マスクを想像します。 斜め読みしていた頃が懐かしいです。掲句は、マスク姿が違和感から日常へ変わりゆく過渡期を描 てくるでしょう。 「マスク」という季語が季節感を持たなくなった現代です。「マスクは季語たり得るか」と時評を (大佳) 色付き柄付きはお洒落でいいななどと、 ワンポイントでキャラクター マスクの着こなしも小慣れ

22



佐藤喜孝

篠田大佳

黄 劇 秋 の 鳥 半 沈 む は までユ た 鳥 ま の ご 母 の ピア 秋 愛

陽が沈むまでユートピアです。」と読めるがこの句は前者であらう。「冬蜂の死にどころなく歩きけ OFFになる時間帯だ。 ○この句形は、「秋の蜂にとって日の沈むまでユートピアです。」または「秋の蜂がゐます。 村上鬼城」ではないが晩秋ともなると陽が沈むとぐっと冷え込む。 昆虫にとってはスイッチが 私には

の学芸会の匂ひがする。 立ってゐるので困る。 ○難解句。「劇」といふとテレビなどで見るドラマではなく、劇場で演ずるものだらう。 分りすぎるよりはおもしろいのだが。私の 半熟玉子も勿論わかる。 晩秋も分かる。 私の頭の中でそれらが我関せずと 『靑寫眞』序文で瀧先生に分から 特に学校

分らない問題は又書く機会があるだらう。 ない句がある、と序文には珍しい物云ひ。 木枯さんにもやはり分らない句を作ると云はれた。 分る

蛸の卵が孵化するまでの飲まず喰はずの献身もテレビで知り感動した。掲句は生き物にはそれぞれ の母性愛の表し方がある。 ○前句とは全く違ふ作り方。 黄落の中で鳥のどのやうな営みを見られたのであらうか。 哺乳類・鳥類・爬虫類と陸に上がった脊椎動物の母性愛には感動する。

須賀敏子

吾 矛 旨 苗 ら 子 弋 ら 火 う ら らバケットが売り切れなのね秋うららお薬がひとつ 減っ たの秋うらら

吾野宿猫も子犬も秋うらら

といふのは若い人らしい使ひ方。この若々しい表現。見倣ひたい。 ○よかったですね、 まさに秋うららですね。 この句の良さは気取らないところ。 「薬が減ったの」

○目的の好きなバケットが売り切れ。 ちょっと残念だがそれでも秋うらら。

○「宿」がいい。勿論人もあなたも秋うらら。 はたっぷり秋うららを味はった。 吾野にはずいぶん行ってゐないなとおもった。

田中藤穂

満 お 月 が 刀魚焼く今年の秋刀魚痩せてゐる 互 に 上っ た ع の い 暮 ふ L 電 秋 話 の 夜 る

も捨てがたい。俗謡の ○お月様のことで連絡し合ふ仲、なんとも風流である。 「月が鏡であったなら………」が頭をかすめた。 同じ月を違ふ場所で見てゐるといふおもひ

○前句の電話の主として読んでもよい。月を肴に電話をして無聊?をかこつ秋の夜長である。 なってきたと聞く。 ○地球規模の変容を秋刀魚の痩せやうに托すおもひもあるのかも知れない。 秋刀魚、 鰯も高級魚に

長崎桂子

学 庭 若 者 仕 童 事 σ 歩きス 片 付 の マ 鶴 朩 瓶 拶 ゃ 落 昼 朝 ち さ ゃ ち か ろ な か

はどんな心境なのだらう。 大人でも人通りの絶えた道ですれ違ふときちょこっと頭を下げてしまふ。見知らぬ人なのに。 ものである。地方ではすれ違ふ人にも挨拶するのであらうか。「昼ちちろ」でそんな光景をおもった。 ○信号で児童を見守ってくれる父兄や、校門の先生に大きな声であいさつする生徒。気持ちの良い

と。 らぬ人がゐた。振り返ったこちらが恥ずかしくなった。桂子さんは歩きスマホに好意的、「朝さやか」 で「もしもし」と後ろから呼びかけらることがあった。振り返ると耳に電話をあてがってゐる見知 ○向こうから来る人が歩きスマホしてゐると、自転車に気がつかず寄って来たらと緊張する。

に狭庭がある。 て綺麗に鎌で掃除をして帰った。でのっぺらぼう。 ○庭のある家に住んだことがないので庭仕事の楽しさも苦労も知らない。引越してきた家にはまさ 何も植わっていない。雑草が生えてきたので楽しみにしてゐたら、 見知らぬ男が来

掲句は日の落ちる前に片付けられた充実感がうかがへる。

森なほ子

五感みな衰へゆけど金木犀野葡萄の昔の恋のやうな色

枝豆の残り嬉しき朝の卓

だらうか。 中の恋よ、 ○「昔の恋」は例へば江戸時代の恋といふことではなく、なほ子さんの体験された恋の色ではない といふかもしれないが、ここは鑑賞者の勝手。 野葡萄はさまざまな色をしてゐる。 といふことは………。 なほ子さんはいや王朝絵巻の

しい。 うなのだらうか。五感が鈍ってきてゐるが「金木犀」 は別。世に三大香木といふものがあるといふ。 通じて外界の物事を感ずる視、聴、 春は沈丁花、 ○加齢で体力が落ちるのは自然の理。五感もだらうか。五感とは【目、 夏は梔子、 そして秋が金木犀。 嗅、味、 花は見て楽しむものが大半だがそれだけでないのは楽 触の五つの感覚。】。確かに私は落ちてゐる。 耳、鼻、 舌、皮膚の五官を 作者もさ

福があるである。 ○美味しい枝豆に会ふとビールが従になってしまふほど。その枝豆が朝の卓に出てゐる。 こんなに枝豆が好きなのになぜ残ってゐたのだらうか 残り物に

赤座典子

黒 部 峡 断 崖 絶 壁 薄 紅 葉

盛大な放水小さき秋の虹

秋光裡遊覧船の小半時

ずして効果があった。 感じがする。 ○ごつごつしてゐる(?)光景をごつごつと漢字を並べて詠んだ。 そして下五は「薄紅葉」。ただ紅葉といはずに「薄」と。これが押せ押せの表現をは 見た事もない景だが理解できた

てゐる。 し訳程度に虹がかかってゐるのを見付けた。大小の対比がおもしろい。 ○ダムの放水であらう。放水時間になると観光客が集まってくるとか。 観たものを過不足なく伝へ その盛大な水量に比して申

○前二句の勢ひに押されたのか小休止といふところ。「秋光裡」では旅の記念としては力不足。

秋川泉

境 山 バ 寺 ゃ を ン 蟇 あ 居 び 7 話 ち 親し 探 込 す む む 蟇 墓

な詮索。 クン」はなんだか蟇にふさはしく聞こえる。親しんでゐるつもりでも蟇はだうなのだろうとは余計 ○いつも見かける蟇に「バックン」といふ名前を付けて気にしてゐる。可愛さのあまりの行動。「バッ

。そしてよい人に見守られてゐる。 のが蟾蜍だと。泉さんは生き物が大好きなやうす。 ○東京オリンピック女子ボクシングで金メダルを獲得した選手が蛙が大好きと聞いた。特に好きな 掲句の蟇は環境のよいところに生息してゐる

な俳句を読ませてもらいたい。 ○蟇とどんなお話をされてゐるのだらう。 会話の内容を俳句に出来たら楽しいこととおもふ。 そん

大日向幸江

駅 墓 金 木 参 IJ 犀 タ 風 缶 ビ の た 尾 長 添 ず の 5 ^ 群に光の 花を添 花 散 5 す \wedge 矢

鶺鴒が歩いてゐた。特異な場で見かける尾長の群に幸江さんは光の矢を当てて優しい目で見てゐる。 ○猛禽類を含め都会に野鳥を見かける機会が多くなった。 中野区に居たときはよく信用金庫の前に

○まだ散るには時期が早い金木犀の花が散ってしまったのを惜しまれて詠まれた。

と表現したらよいかわからないが、 ○この句を読んでゐてしばらく墓参りをしてゐないなあと後ろめたさを覚えた。墓参りの後のなん 心が軽くなった気分は好きなのだが足が遠のいてゐる。

黒澤佳子

た \Box \Box め 5 ず 妹 面 な 影 んぎや 活 る け 7 秋 深 の 暮

「ためらはず」答へるお歳なのか。日本の画家や書家は落款の他に歳を揮毫する。おもしろい習慣だ。 くのを遠慮する。 ○をさない子が掌を広げて「みっちゅ」などはことの他よい。それが二十歳過ぎたころから年を訊 ところが何故か後期高齢者になると自慢げに歳をいふし、 訊かれる。佳子さんも

ナワクチンはだれでも接種できるわけではない。 の差障りがあってワクチン接種が難儀なのであらう。「なんぎ」といふ語彙に優しさが現はれてゐる。 ○「コロナ接種」をしたら直コロナ患者になってしまふ。 ○しみじみ良い句だなあと何度も読み返した。このやうに子どもに思はれてゐるお母さんはなんと そのために予診でチェックする。 コロナワクチン接種のことだらう。 妹さんも何らか コロ

幸せな方だなあとも思った。

面影活けてをり」なのである。 水仙をただ活けてゐるのではない。 これが俳句の表現であらう。 水仙を活けてゐると母を思ひ出すといふのでもない。 佳子さんにも至福のひとときである。

七郎衛門吉保

冬 嚚 ブ カ 有 ンカン昭 次 郎 和歌謡 の の 秋 の 秋 の の 空 昼

まり良いことは聞かなかった。 作者はその後ろに立ってゐる筈である。 カンカンは「銀座カンカン娘」であらう。 キーワードからブギといへば市丸の歌った「三味線ブギ」、笠置シヅ子の「東京ブギウギ」が浮かぶ。 ○ブギは音楽用語、ブギウギとも、ジャズスタイルのひとつとか。しかしここでは昭和歌謡といふ ねるのか。 んでゐた数年後に流行った。市丸と云へば母が東京へ出てきて少しの間女中さんをしたらしい。あ 作者名があり作者を少しでも知る人には理解できるところもある。私はかういふ表現を このやうな句の書き方、表面上は事実をを記述してゐるのみの時 作者がゐるはずである。 高峰秀子がレコード化してゐる。二曲とも鬼畜米英と叫 どのやうな顔をして作者は裏面に

のか、 などしなかった。今の結婚式はパーティとあまり変らないか。「姫」は新婦の親が慈しんで称んだ するときは、特に第三者になって自作を読み反す。そのやうなだいじな働きを季語はしてくれる。 に納得した。 ○さうだ。昔の嫁ぐ人は無口であった。結婚式で声を聞くことはない。新婦にに限らず新郎も挨拶 過保護に育った新婦を揶揄したのか、「嚚しく」とふ初めて見る言葉を辞書で引いておほい

買して並べて端から一つづつ堪能した。 ○この句の「冬隣」は効いてゐない。季重なりの弱さが出てしまった。今年は妻の前に富有柿を箱

柿

熟柿

篠田純子

てみたら、甘くて美味しい。今や熟柿の虜になってしまった。えそのままにしていたら熟柿になった。スプーンで掬い食べい、育てる頃は、母に従い柿を食べることは無かった。それみ、育な、柿は冷えるからと口にしなかった。私も子どもを産



柿の日

篠田大佳

りました。色々なことが重なった一日でした。たから、柿の日だそうです。伊藤園のサイトを見ると、「柿日和」で作った拙句が今日の一句見ると、「柿日和」で作った拙句が今日の一句中の世界の上げられていました。

名寄

須賀敏子

こ。

で来てくれた。彼方此方の家の庭の柿の実が色で来てくれた。彼方此方の家の庭の柿の実が色に十年ほど前の十月、北海道より友人が訪ね

かったのです。 私達が育った北海道名寄地方には柿の木は無



湖のほとり

田中藤穂

直売

長崎桂子

私の住まいの周辺には柿の木を見かける事は全くありません。其の年の九月以降は秋のお彼岸、報恩講、年越詣と、お寺とお墓を訪ねる機会があり、近鉄を下りて十五分余の道筋の家々には、柿の木がある家が数軒あり、毎年は、柿の木がある家が数軒あり、毎年は、柿の木がある家が数軒あり、毎年がある。

す。帰路は柿を購入します。種類ほどの柿が大量に盛られていまには近隣の農家が腕を競うように、三其の近くにはお店があり、この時期

森なほ子

家柿

おいしいのである。 これがとても甘くておいしいのである。 これがとても甘くておいしいのである。 これがとても甘くておいしいのである。 これがとても甘くておいしいのである。 まあ、あまりに数が少ないので目立たないため、まあ、あまりに数が少ないので目立たないため、まあ、あまりに数が少ないので目立たないため、まあ、あまりに数が少ないので目立たない。 様 うちに二本の柿があるが、あまりならない。 柿 おいしいのである。

干柿樽柿

秋川泉

百目柿。 ていない。 懐かしい思い出である。残念なことに、 な父の役目であった。秋は柿の実とり 今はもう寺の庭に柿の木は一本も残っ り入れた。その後の干柿、 木から上げ下げされる笊の中の実を取 の年行事の楽しい季節で、 すいからと、子供は登ることを禁じら に登りたかったが柿の木の枝は折れや 生家の山寺には、 柿の実をちる役は、 大きな渋柿があった。 富有柿·次郎柿 木登りの好き 樽柿作りも 家族総出で 柿の木



夢の柿

大日向幸江

む事になった。

林畑の有る人に言われ友達になった。

林畑の有る人に言われ友達になった。

林畑の有る人に言われ友達になった。

柿の夢は夢のまた夢でした。



卜石神井日録 3

佐藤喜孝

スマホカメラで自撮りしてマイナンバーカードを申 ぶら下げて歩けない。スマホで我慢してゐる。表紙は て帰ってきたことで大満足。写真は一眼レフなどもう が、本人はさういふものとあきらめてゐるから出かけ 用しやうとの目論見。前日慌ててシルバーパスを申請 ミュレーションをした。 穂さんの躊躇するお気持ちもよくわかる。行程をシ 京橋の「あをやぎ句会」に恐る恐る出かけた。田中藤 を境にしてバスや鉄道に乗る機会がなくなった。群衆 せたビルが街路樹の秋色の向うに建ってゐた。コロナ 番出口を出たところ。道路に出て振り返ると緑を滴ら の中に入って行けるのか自信がなかった。そんななか コロナ以後の初外出のうれしさの記念の一枚である。 してきた。 11月号の表紙の写真は地下鉄銀座線の「京橋」駅3 取に来なさいと通知が来た。 傍から見ると杖を突いた危なっかしい姿だ バス・地下鉄・タクシーを利 スマホカメラも馬鹿

にはできない。

らしい。二位の世田谷区の倍の面積と知って驚いた。 さがり屋だが、もの珍しいからか、パソコンの前に坐っ 剥いて作ったからか美味しかった。でかい赤蕪もスラ 束を頂いた。ネットで調べて煮て食べた。自分で皮を ていきなさい」と買ったものより重くて大きい芋茎の さうかい、私は頭が悪いが足腰健康で、………これ持っ 旨かった。売主さんが「私は八十三、あんたは」「ほー た。塩が効きすぎてゐたので塩を抜いていただいた。 見かけない。 てゐる。近くの直売所は近代化されてをり?人の姿を 近くに「農産物直売所」が二か所も地図に書き込まれ 見の頃は「芒あります」といふ農家もあった。住ゐの 盛んで楽しみ。農地に囲まれてゐると気付いた。 西武新宿線を渡った杉並区にも農地がある。貸農園も てゐるのに飽きるとそんなことをして楽しんでゐる。 イサーで薄く切って酢と砂糖で漬けて頂いた。面倒く 練馬区は二十三区内では一番農地面積のあるところ 少し離れた直売所で白才の漬物を買っ お 月

ウー ド俳句辞典 (ほお―ぼく)

佐藤

深明けて頬の強張る冬満月 高き変へる頬くっきりと四十雀 石仏の頬ゆるみたる夕立ちかな 戸井の頬紅変へて病上り 寒明やパンパンパンと頬に人 悪明やパンパンパンと頬いる を密密の山査子の頼に人差指押して 三月の頬があるである を密密の山査子の花頬寄する をなき風願へど頬に火熨斗かな をなき風願へど頬に火熨斗かな をなさる空気きりきり流れ星 類にささる空気きりきり流れ星

赤佐座 藤

秋長川崎 なほ子 典子 · 桂泉子 純子 藤穂 呈保

赤山森 座荘 芝宮須磨子 慶子 理和

臈微 た け い

し人の遺影は微笑まずし友の遺影や夏深む

ツの遺影微笑む吾亦紅**ほほゑむ**

してほほゑ

し人走馬燈

典恭 子子 恭子 裕子 上层

斉 竹 赤 長 藤 内 座 崎

うしみ

明 ほ け の

黄水仙鉢の寸土のほか持たず秀麗といふほかはなし冬の富士水中花捨つべきものは他にあり水風や笑ふほかなし老いに老いれ風や笑ふほかなき蝉部落土蔵紋昏るるほかなき蝉部落

イラス・ イー月微笑みうかべこときれし 十一月微笑みうかべこときれし 一年歳飴わたしもいつかほほゑんで ではほゑみてほほゑまるるや更衣 でなっているではほゑがないな ではほゑみてほほゑまるるや更衣 を強いの母のほほゑむ鳥麦 一年の対けで梅の花 を変がらの母のほほゑが笑かな できるですれし を変がらの母のほほゑがまるるや更衣 がらの母のほほゑみであまるるや更衣 を変がらいないないないないないない。 はいて遭ふほぼゑみの涼しさよ な地にて遭ふほほゑみの涼しさよ をあらの母のほほゑみの涼しさよ をあるの母のほほゑみの涼しさよ をあるの母のほほゑみの涼しさよ をあるの母のほほゑみの涼しさよ 牟尼 かほほゑれたこときれれ んしる で

さよ 長篠田須篠長木佐山木村 崎田中賀田崎 茂 茂 桂純藤敏純桂登喜慶登 子子穂子子子子子 長井崎上

長佐藤 恭子 桂石 子動 桂子

後鎌赤芝渡 藤倉座 邉 5 人典尚友 恵子子七

是遠木早堀佐吉篠 建藤村崎内藤成 茂 登泰一喜代 美 実子江郎孝子 佐藤 喜孝 定梶じょう 実

庭寒顏鯰園菊暑飼 雀捕 産が蛾を空中捕獲 るの 紫芸 で 野菊 野菊 長 灯影 新見ほか! 素苦しも かっほみ 獲する努力 かに草も無くいてのほかいな顔見知り

して 他ほかに しのほか でなる。 ではかった。

あるときは灯影にこはき雛の短庭流る青白き火影魂祭梅雨障子灯影に心ゆるませて飛花のせて男傘ゆく灯影かな 顔

関

ゆき

田

純子

海へ向きぽかぽか下る野水仙軽やかにぽかぽかぽかぽかまかと春の電ぽかぽかまな黄水仙ぽかぽかの縁に通さる黄水仙

森

理和

木村茂登子

木赤佐村座藤

典子

|茂登子

ジュリアンや摘めばきっぱりぽきっと言ふぽきっと

募金

四才児「そもそも僕は」と敬老日黒を被てもう一人の僕菊の花

赤堀 座 内

森 な 裕子 ほ子

斉藤 典一子郎

39

7

森 なほ子 大日向幸江 中川句寿夫

38

あとがき

随筆のお題「楽器」

はよく知られたところ。 は二十万円を越えるものもある。 芸会でよく登場した。 をおねだりした。 れる方がゐるとおもふ。 んのハーモニカ、 あの爪弾きの音は他の楽器に無い情緒がある。 んのハーモニカ演奏会。そのとき記念にとハーモニカ 楽器で思ひ出すのは喫茶「傳」で催した堀内一郎さ 純子さんの三味線は「あを」の人に ハーモニカは戦後の焼跡での素人演 いまでも庶民の楽器だが高級品 他にもきっと爪を隠してをら 和楽器では三味線。 一 郎 さ

一期一会

年は 縫っての句会。来月の句会の予定は入ってゐるが何時 お世話で開けた。コロナウイルスの盛衰のはざまを 年の終りに同じことを反省する筋金入りの凡人。 11月12月と久し振りの句会を純子・大佳で両人の

> くる。 人間の弱点を巧みについてくる。 確たる意志をウイルスは秘めてゐるやうだ。 人類を狙い撃ちして

猛威を振るい始めた。

ウイルスはなかなか頭がよい。

中止になってもをかしくない状況。

コロナの代替りが

頃の句会は当に一期一会である。



ゆうちょ銀行 二○二一年-発行所 カット/須印刷・製本電話 佐藤 喜孝 (サトウ ヨシギ行 (普) (店番 018) 458640 表紙・佐藤 - 人須賀忠男・福井美佐子・ティリ エー/須賀忠男・福井美佐子・ティリ エー/ 須賀忠男・福井美佐子・ティリ エー 十二月号 十二月二十五日 中 177-0042 中 サンハイツ石神井2 一階 東京都練馬区下石神井一丁目六の三 1900 9828 4244 レイアウト 4 5 8 6 4 0 2

40

ヨシタカ)